備える 3.11から 災前の策

第147回 大河ドラマに見る災害史

民の疲弊 変革を呼ぶ

NHK大河ドラマ「西郷どん」が七日から始まった。幕末の混乱期に登場し、明治政府を誕生させた主人公西郷隆盛のように、大河ドラマはこれまで、時代の転換点に立ち会い、道を聞いた人物を多く取り上げてきた。名古屋大減災連携研究センター長の福和伸夫教授は、かねて「時代を変革させるきっかけは民の心の疲弊。それには多くの場合、大きな災害が関係している」と説く。新年を迎え、教訓としての災害史を学ぶきっかけに大河ドラマは最適、とすすめる福和教授に聞いた。（小沢慧一）

豊臣家 地震とともに衰退 ◆真田丸◆

■伏見城の天守閣大破

二〇一六年の「真田丸」は地震を扱った回が二話もあり、私にとって特に関心の高いドラマだった。第十四話「大坂」では、一五八六年の天正地震で透け感う徳川家康の様子が描かれた。

天正地震は近畿から中部の内陸を襲い、多くの戦国大名が被害を受けた。豊臣秀吉は小牧・長久手の戦いから二年後、美濃の大垣城から三河へ攻めこもうとしていた。城が倒壊、慌てて大坂へ逃げ、家康とは和解することになる。もし地震がなければ、家康の天下はなかったかもしれない。

第二十九話「異変」では、九六年の慶長伏見地震で、明の使節を接待するため改修した京都・伏見城の天守閣が大破し、数百人が犠牲になった。

結局、明との講和は頓挫し、翌年から朝鮮へ出兵した慶長の役が始まった。一年半後に秀吉は死去。関ケ原の戦いと大坂冬の陣・夏の陣の間には、一六〇五年の慶長大地震、一一年の会津地震と慶長三陸地震が起きている。豊臣家は、相次ぐ地震と歩調を合わせるかのように滅亡の道をたどった。と考えることもできる。

■幕末にも頻発

幕末は戦国時代と並ぶくらい大河ドラマに人気のある時代で、「西郷どん」以外にも十三作品ある。この時代を動かしたのは安政の大地震だ。二〇〇八年の「篤姫」でも安政江戸地震が描かれた。

この地震で、日比谷入り江を埋め立てた大手町から丸の内で大名屋敷が被害を受けた。特に水戸藩の大名屋敷は残らず崩れ、前藩主の徳川斉昭を支えていた藤田東湖と戸田忠太夫が圧死し、尊王攘夷派の力がそがれたといわれている。

一方、斉昭とライバル関係だった井伊直弼の屋敷は地盤の良い紀尾井町にあったため、軽微な損害で済んだ。その後、直弼は大老に就任、一方斉昭は安政の大獄で失脚。地震が二人の明暗を分けたとも言える。

日米和親条約が結ばれた一八五四年の伊賀上野地震から、六七年の大政奉還までに十一の地震が起きた。将軍家をはじめ水戸、紀州、尾張の御三家が全て被災、そんな中、長州や西郷隆盛の薩摩は災害に遭わず、両藩は力を蓄えることができた。

■関東大震災から戦争へ

二〇一九年放映予定の「いだてん～東京オリムピック噺」では、一九一三年の関東大震災が描かれるようだ。

関東大震災は、戦争への道を聞くきっかけになった。地震とも言える、十万人が死亡し、関東地方全体で約三十七万棟が倒壊や火事の被害を受けた。日銀の推計では、この地震による物的損失は当時の国家予算の三倍に上った。

政府は、企業や住民が債務者になっている支払いを猶予する緊急勅令を公布し、震災手形を政府が補償する政策を打ったが、不良債権化し、金融恐慌が起きた。

その後も続く震災とシクロするように、社会の不安は高まっていった。二五年に兵庫県北部であった北但馬地震と同じ年には「治安維持法」が制定された。

■災害史を学ぼう

大地震が起きると多くの人が食べていけなくなり、混乱が起きる。すると「時の権力者は民を抑圧して、混乱を収めようとする。権力に立ち向かう者が人々の共感と支持を集め、時代を大きく変える人物へと成長する。だから、何度も大河ドラマ化される時代は、災害と深く関わっている。

学校では災害史をなかなか教えない。大河ドラマを見ながら災害の年表を見て、時代の変革の背景にいつも災害があるということを学んでみるのもいいのではないか。

「時代の変革の背景には、いつも災害がある」と話す名古屋大の福和伸夫教授＝名古屋市千種区で

次回の「備える」は2月12日の掲載予定です。

薩長 被害免れ力を蓄える ◆篤 姫◆

1855 安政江戸地震

1707 宝永地震

1586 天正地震

1662 寛文近江・丹波地震

1596 慶長伊予地震

1605 慶長豊後地震

1611 慶長三陸地震

1596 慶長伏見地震

地震の歴史と大河ドラマ

「歴史に学ぶ」ための書籍は数多く発行されている。江戸、昭和、そして近い将来をテーマにした3冊を挙げる。

歴史に学ぶための本

地震の社会史 安政大地震と民衆 吉川弘文館、2800円（税抜き）、北原糸子著

江戸を襲った安政大地震で人々が熱狂した地震鯰絵（なまずえ）や瓦版からは、被災直後にもかかわらず地震による世直しへの期待や至福感すらうかがえる点に筆者は着目。身分を超えた「ディザスターユートピア（災害理想郷）」が出現した結果だと分析する。

戦争に隠された「震度7」 吉川弘文館、2000円（税抜き）、木村玲欧著

戦時中に発生した「東南海地震」と「三河地震」は、それぞれ1000人以上の死者・行方不明者が出たにもかかわらず、ほぼ報じられることはなかった。航空機や造船などの軍需工場に多大なダメージが及んだからだ。気象や災害も軍事機密とされた当時の新聞記者や、被災者の体験談から葬り去られた地震の教訓を探る。

次の震災について本当のことを話してみよう。 時事通信社、1500円（税抜き）、福和伸夫著

「国民の半数が被災者に」。名古屋を拠点に活動する福和教授が、読者に災害を「わがこと」として考えてもらおうと、強いメッセージで警鐘を鳴らす。映画やドラマ、地名など、身近なところから学べる防災のテーマも豊富で、防災を考える人の「赤本」となる1冊。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています